学術論文

ソマリランドの名の下での人びとの集散：Somaliland Society UK を事例に

須　永　修　枝

富山大学人文科学研究第 77 号抜刷
２０２２年８月

学術論文

ソマリランドの名の下での人びとの集散：Somaliland Society UK を事例に

須　永　修　枝

はじめに

「私たちはソマリランドのもとで集まりました。私たちがロンドンのソマリランドディアスポラのために何ができるか。[1)]」

1990 年代にロンドンでは，ソマリランドという名の下で人びとを集めようとする試みが始められた。上記の言葉は，この試みを始めた男性 A が筆者の聞き取りで述べた言葉である。男性 A の活動は 1998 年に Somaliland Society UK（以下，SSUK）の結成に至り，これはイギリスにおいてソマリランドを名乗る最も古い活動と考えられる。SSUK は 2001 年にはメンバーの人数が 180 人ほどおり [2)]，ソマリランドの独立宣言日を祝うイベントなどを実施してきた。ロンドンで筆者が調査をしていた 2016 年 10 月に，ソマリランドの大統領がロンドンに来た際のミーティングにて，SSUK の代表である男性が挨拶をしたこともあった。ただし，SSUK の代表と言っても，当時は実質的にこの男性が一人で SSUK と名乗っていた。冒頭の言葉を話した男性 A も，SSUK の活動について「私はリタイアした」と筆者に言い，SSUK の活動から完全に離れていた。1998 年に発足した SSUK は 2016 年の時点で存在はしていたものの，その活動は停滞していた。

本稿は，SSUK の発起人である男性 A への聞き取り結果をもとに，SSUK の発足から停滞までのプロセスを三つの点に着目して分析する。第一に，いかなる背景にて SSUK は発足したのか。第二に，SSUK に参加した人びとの間にはいかなる繋がりがあったのか。第三に，なぜ SSUK の活動は衰退したのかである。これらの点を分析することで，ソマリランドという名乗りの下での人びとの集散にいかなる特徴があるのかを明らかにする。

ロンドンにいるソマリランドの人びとは，所謂「ディアスポラ」として位置付けられてきた。

1）筆者によるロンドンでのインタビュー（2016 年 1 月 20 日）。

2）この人数は SSUK が 2006 年 4 月から 2009 年 6 月までの活動内容をまとめたレポートに記載されているものである。ただし、このレポートが発行された年月日は掲載されていない。

未承認国家の議論についてはここでは立ち入らないが，ソマリランドは未承認国家に分類されている[3)]。世界の未承認国家を分析したCaspersen（2012）は，ソマリランドを支える存在としてディアスポラを捉えている。なお，ソマリランドにはディアスポラを対象にしたソマリランドディアスポラ事務局（Somaliland Diaspora Office）が外務および国際協力省（the Ministry of Foreign Affairs and International Cooperation）の管轄下に設置されており，ソマリランドディアスポラ事務局のウェブサイトにはソマリランドとディアスポラの繋がりの重要性が示されている。これらを鑑みると，ソマリランドのディアスポラなるものが境界付けられた一つの主体として存在しているかのように考えられるが，それでは集団主義（groupism）の問題に陥る。

ディアスポラがあたかも「単一の主体」（ブルーベイカー 2009; 393）として論じられる傾向を問題として取り上げたブルーベイカーが主張しているように「…ディアスポラを，境界付けられた集団としてでなく，むしろ実践，事業，企図，態度などのカテゴリーとして扱うことによって，ディアスポラを脱実体化すること」（399 頁）が重要である。

このブルーベイカーの指摘を踏まえ，本稿は民族を範疇と捉え，「名」の問題として論じた内堀（1989, 1997）の議論を参照し，ソマリランドという名およびその名乗りのもとでの人びとの集散に着目することで，集団主義を回避しながら人びとの動態を分析し，その集散に見られる特徴を明らかにすることを目指す。

集団主義の問題は，ソマリ人（Somalia）のコミュニティ団体（community organizations/associations）の特徴を論じている従来の研究でも見られる。これまでの研究では，ソマリ人を集団として捉え，その中では包括的な団体が形成されず，無数の小さな組織に分かれていると論じられてきた。各組織は一人または家族の数名で運営され，外部資金の獲得をソマリ人が相互に争い，しかしながら資金を獲得するノウハウがないために運営もままならず，実際に機能している組織の数は限定的であり，組織と言っても「名ばかり」であることが示されてきた。その原因として主に指摘されてきたのは，ソマリ人の内部が氏族（父系リネージ）の所属で分かれていることである（Hopkins 2006, Pirkkalainen *et al*. 2013）。つまり，ソマリ人は内部で氏族の所属が異なるために人びとをまとめる包括的な組織が形成されないというように，ソマリ人をあたかも境界付けられた集団として取り上げたうえで，氏族の所属による細分化を本質主義的に論じている。

これに対して，SSUK の事例はソマリ人の間で氏族を強調するよりもソマリランドという名のもとで組織を形成しようとした動きである。その際，人びとは氏族の所属のみを基準として集まったのではない。つまり，既存の研究が指摘してきたように，ソマリ人という「集団」がそれぞれの氏族の所属のみに閉じていることを所与とし，それを本質主義的に論じることは適

3）遠藤（2015）はソマリランドの未承認国家としての特徴を詳細に論じている。

切ではない。むしろ，後に述べるように SSUK の事例から考えられることは，氏族の所属自体が組織の細分化をもたらすというよりかは，氏族がどのように政治利用されるのかが人びとの集散に影響することである。ソマリランドディアスポラをあたかも明確な境界に区切られ，不変的な特徴が内在している集団として論じることには問題がある。ゆえに，ソマリランドという名の下における人びとの集散を分析する本稿は，集団主義や本質主義とは異なる視座を提示することに意義を見出すことができる。

本稿で使用するデータは，筆者が 2015 年度の調査にて実施した，SSUK の発起人である男性 A への聞き取り結果である。当時 80 代であった男性 A は SSUK だけでなく，ソマリランドの独立宣言後である 1994 年にソマリランドで紛争が発生した際に平和委員会（The Peace Committee for Somaliland）を結成し，ソマリランドにて政府と反政府勢力の間の交渉を促したこともある人物である [4)]。SSUK と平和委員会の活動は関連していることもあり，聞き取りはその二つについて同時に実施した。2015 年度の調査での聞き取りは，一回二時間程度のものを計五回実施した。聞き取りをしている間，男性 A は常に「他に質問は？」と聞き，筆者が考えが及ばないことや同じことを繰り返し質問したことに対しても，男性 A はその都度対応した。場所は東ロンドンにある「ソマリランド大使館」の事務所の一スペースを借りていたため，途中で他の人物が会話に参加することもあった。なお，聞き取りは英語で行い，許可を得て録音した。

確かに，SSUK における人びとの集散を男性 A への聞き取りのみから示すことで偏りが生じる可能性はある。しかし，ソマリランドで紛争が発生した際にも和平交渉を促す活動を行い，ロンドンでは SSUK を発足させたほど，ソマリランドという存在に対して活動的であった人物が，いかなる背景により行動を起こし，そして男性 A の言葉を借りれば「リタイアした」のかに焦点を当てて考察することは，活動を企図した人びとの特徴を考えることにおいても有益である。

以下では，まず，ソマリランドの独立宣言にいたるまでの経緯および人びとがイギリスで生活するようなった背景を説明する。その後，男性 A への聞き取り結果を示しながら SSUK の発足から衰退にいたるまでの人びとの集散を上記の三点に着目しながら分析し，最後にソマリランドという名の下での人びとの集散に見られる特徴を考察する。

4）ソマリランド平和委員会については須永（2017）が、本稿で男性 A と示した人物への聞き取り結果から分析を行っている。男性 A がロンドンで SSUK に繋がる動きを始めた際にソマリランドにて武力対立が悪化したため、男性 A はソマリランド平和委員会を設立し、平和委員会が終了した後に再び SSUK の発足に向けた活動を活発化させた。

植民地支配と紛争にいたる経緯

ソマリランドが位置するアフリカの角には主に遊牧を営んできたソマリ人が暮らしている[5)]。ソマリ人はほとんどがイスラーム教徒であり，地域によってアクセントに違いがあるもののソマリ語を話す。ソマリ人の内部は氏族に基づく所属に分かれている。植民地時代に行われた調査（Lewis 1961）によると，従来，ソマリ人は国家を持たずに氏族のシステムに基づき秩序を形成してきた。例えば, 血縁集団 A に属する人物が血縁集団 B の人物を殺害したとする。その殺害された人物が男性ならば，血縁集団 A は血縁集団 B に対してラクダを 100 頭，女性ならば 50 頭を支払う。血縁集団の長老たちは問題が発生すると木の下で話し合いをすることで対応してきた。ソマリ人は国家ではなく血縁集団に基づくシステムによって秩序を形成してきたのである。

1880 年代にソマリ人が暮らしてきたアフリカの角は植民地政策の対象となり，イギリス領，イタリア領，フランス領，エチオピア領に分割された。現在，国連の加盟国であるソマリアは 1960 年 7 月 1 日に旧イギリス領と旧イタリア領が連合を形成したことで発足した[6)]。ソマリア発足後は，旧イギリス領は北部地域，旧イタリア領は南部地域と呼ばれるようになった。

ソマリアの首都が旧イタリア領である南部地域のモガディシオに置かれたことで，行政や高等教育機関がモガディシオに集中する一方，北部地域となった旧イギリス領の開発は進められず，北部地域はソマリア国内で周辺化されるようになった。また，独立当初から大統領などの役職についた人物が，自らの氏族を優遇するなどし，国家運営における氏族の位置づけを巡って問題が発生した。

この状況において，1969 年にクーデターによって南部地域出身のシアード・バーレが大統領に就任した。当初，バーレ政権は従来とは異なる方法で政治を行おうとしたが，次第にバーレ政権は氏族を利用した政治に過度に傾倒するようになり，自らの氏族であるダロッドを優遇した。他方で，バーレ政権は北部地域を基盤とする氏族であるイサックを差別するようになったため，イサックの人びとはバーレ政権に不満を持つようになった。とりわけ，ソマリアが 1977 ～ 1978 年のエチオピアとのオガデン戦争に敗れたのち，バーレ政権とイサックの関係は悪化した（Bradbury 2008）。

5）ソマリ人の多くは遊牧をしているが、主に南部地域のジュバ川やシャベレ川の近くでは農業も行われている。

6）イギリス保護領ソマリランドは 1960 年 6 月 26 日に独立し、その 5 日後である 7 月 1 日に国連の信託統治が終了した旧イタリア領と合併し、ソマリアの一地域になった。

紛争と独立宣言

バーレ政権に対してイサックの人びとの不満は高まったものの，強権的な政治をしているバーレ政権をソマリア国内で批判することは容易ではなかった。この状況で動き出したのが，ソマリアの国外にいた人びとである。旧イギリス領のソマリ人単身男性は保護領時代から船員としてイギリスのカーディフやリバプール，ロンドンなど船渠のある地域に居住していた。また，1960 年のソマリア独立後は出稼ぎや留学などによりイギリスに限らずアラブ諸国にもソマリ人が暮らしていた（Hansen 2007）。国外にいた彼らは 1980 年代からバーレ政権に反対する運動を始め，その活動の拠点はロンドンに設けられた。この反バーレ政権を掲げる活動は Somali National Movement（ソマリ国民運動：以下，SNM）と名付けられ，SNM のメンバーの多くをイサックが占めた[7]。

1988 年に，SNM とバーレ政権の対立は地上戦へと至り，イサックが多く住む北部地域では紛争が激化していった。最終的にこの紛争では SNM が北部地域からバーレ勢力を追い出した。その後，紛争の舞台は南下して旧イタリア領へ拡大し，ソマリアの首都であるモガディシオがその中心地になった。バーレの政権運営に不満を持っていたのはイサックだけではなく，他の氏族も同様に武力闘争を始めたためである。この紛争により 1991 年にバーレ政権は崩壊した。

当初，SNM は武力闘争を行う他の集団とともにソマリアを再建しようとしていた。しかし，武装集団間での意見の不一致もあり，最終的に北部地域では 1991 年 5 月 18 日にイサックを含めた全ての氏族の長老による会議にて，イギリス保護領時代の境界線に基づき，ソマリランドとして独立をすると宣言した。

ソマリランドの独立宣言は紛争下における極めて混乱した状況で行われた。上記のように，SNM は他の氏族を基盤とする武装集団と連携してソマリアを再建することを考えていた。SNM を中心とする旧イギリス領の人びとはソマリランドの独立を目指して戦ったのではない。つまり，既に何らかの強い集団的な意識を共有している結果として，ソマリランドの独立が宣言されたのではない。旧イギリス領の人びとが必ずしも一枚岩でないことを示すかのように，ソマリランドの独立宣言後である 1994 年 11 月と 1995 年 3 月には激しい武力衝突が発生し，ソマリランドは内戦状態に陥った。

この内戦を経て，ソマリランドでは 2001 年に国民投票によって憲法が承認され，この憲法に則って政党政治が始まり，選挙が行われるようになった。その後，現在まで政権交代も平和裏に進められてきている。もちろん，ソマリランドは未承認国家であり続けているため，国民投票や選挙による政権交代といってもそれらは他国による承認の対象にはなっていない。ソマリランドは主権国家システムにて未承認国家という独自の発展を遂げている。そして，上述の

7）SNM が結成されるまでの経緯は Lewis（1994）が詳しい。

ようにソマリランドの存続を支えている存在として「ディアスポラ」が捉えられてきた。

以下では，ソマリランドという名のもとでの人々の集散を男性 A への聞き取り結果を基に分析する。なお，ソマリランドの独立宣言後の内戦で対立する勢力の間に入って和平交渉を促したのが，男性 A も参加したソマリランド平和委員会である。男性 A は 1990 年代に，ソマリランドでもロンドンでもソマリランドの名のもとで人びとが集まり，話し合うための活動をしていた。

男性 A への聞き取り結果

既述したように，2015 年時点で男性 A は 80 代であり，1990 年代には SSUK の発足のみではなくソマリランド平和委員会として紛争解決にも尽力した人物である。流暢な英語を話す男性 A は，下記で述べるようにソマリランドがイギリス保護領であった時代に世俗教育を受けていた。男性 A がはじめてイギリスに滞在したのは 1957 年に保護領の奨学生としてであった。男性 A がイギリスにいる間に，イギリス領はイタリア領と合併してソマリアという国の一部になった。イギリス滞在を終えた男性 A は，1968 年にソマリアの首都に制定されたモガディシオの政府機関で働いた。その後，1982 年からは世界保健機関に勤め，退職をした後に 1994 年からロンドンで暮らしている。

聞き取りをした当時，男性 A はイギリス保護領時代のソマリランドにおける世俗教育の歴史を調べており，聞き取りの際にもソマリランドの世俗教育の特徴や歴史を話し，それに関連させて自分の経験や考え方を語った。常に冗談を織り交ぜながら話す男性 A は，自らも幼少期は遊牧生活をしており，自分たちの世代はどんなに知識人であっても背景は遊牧民であると言っていた。男性 A はソマリ人の慣習に対して，問題が発生した際に長老たちが木の下に集まって話し合いをすることを肯定的に捉えており，ソマリランドではそれが機能しているため，紛争が継続している南部地域とは異なるという考えを持っていた。他方で，誰かが罪を犯した際に血縁集団としてそれに対応することについては否定的であり，個人で責任を取ることの重要性を述べたことがある。男性 A はソマリ人の慣習に対して敬意を示しつつも，氏族という集団と各々の個人の関係を再構築する必要があると考えているようだった。

本節では男性 A への聞き取り結果を基に分析を行うが，そこには世俗教育に関心を持ち，氏族という集団と個人の関係を見直す必要があるという男性 A の考え方が反映されている。言うまでもなく，他の人物に聞き取りをすれば他の見方が示されるだろう。しかし，平和委員会にも参加し，SSUK をも発足させた人物の考え方を基に分析することで，当時の活動家の考えを知る上でも男性 A への聞き取り結果の分析は有益である。

以下では三つの点に着目して SSUK の発足から衰退までのプロセスを分析する。一つ目は，SSUK の発足にいたる背景である。二つ目は，SSUK に参加した人びとの繋がりに注目する。

三つ目は，SSUK の活動が衰退した原因である。ソマリランドという名乗りを掲げる SSUK の活動における人びとの集散の過程に着目しつつ，その特徴について考えてみたい。

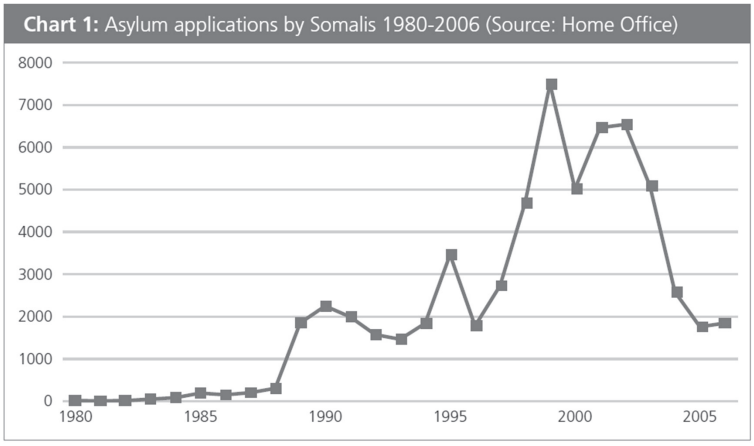
いかなる背景にて SSUK は発足したのか

SSUK は 1998 年に発足したが，男性 A は SSUK の設立に動き出した時期について 1995 年だと話した。なぜ男性 A は，その時期に SSUK の発足に繋がる動きを始めたのか。男性 A は，活動を始めようとした理由を次のように話した。

> 国で問題が起きた時, 人びとは住み慣れた場所や友人などから離れざるを得ませんでした。それが，紛争が起きた社会の状況です。人びとは移動することになり，住む場所を追われました。…（中略）…人びとはここに来た時，言葉を知りませんし，文化を知りません。なので，カルチャーショックを受けます。それが私の頭のなかにあった考えで，私が対応しようとしたことです[8)]。

男性 A が SSUK の設立に繋がる活動について考え，動き出した時期に，イギリスでソマリ人難民が増加していた。図 1 はイギリスに庇護を申請したソマリ人の人数を示している。図 1 では，1980 年からソマリ人の庇護申請者数は年による増減が見られるものの，増加傾向にあることが示されている。男性 A が活動し始めた 1995 年にはそれまでで最も多い申請者数となっている。なお，1985 年から 2006 年までの間，イギリスにおける庇護申請者数のなかでソマリ人の数は常に上位 10 番目までに入っていた（Change Institute 2009）。

図 1　イギリスでのソマリ人の庇護申請者数



出典：Change Institute 2009, 25 頁.

8）筆者によるロンドンでのインタビュー（2016 年 1 月 20 日）。

男性 A は増加するソマリ人難民が抱える問題に対して何かできることはないかと考え，対応を模索し始めたのである。しかし，なぜそれがソマリランドという名を掲げた活動に結び付いたのだろうか。また，下記で述べるように SSUK はその活動を行うに際して，イギリスのチャリティ委員会（The Charity Commission）に団体の設立を申請していないという特徴がある。男性 A がソマリランドという名を掲げた活動をどこからも独立したグループとして発足させた背景には，以下で示すようにソマリランドという名乗りを取り巻く疑念があったと考えられる。

ソマリ人の庇護申請者数を示した図 1 は，Change Institute が 2009 年に発行したレポートに掲載されている資料である。イングランドにおけるソマリ人の状況が網羅的に示されているこのレポートには，多くのソマリ人が庇護申請時に差別的に扱われ，他国からの申請者よりも不利な状態だったという認識を持っていることが述べられている。実際にソマリ人が他国からの庇護申請者よりも差別的に対応されたのかは判断しかねるが，男性 A によると，難民認定のプロセスにて多くの人びとは，その当時に紛争が悪化していた地域であるソマリランドから来たと主張した状況が生じていたという [9)]。

上述のように, ソマリ人はソマリランド（旧イギリス領地域）, ソマリア（旧イタリア領地域）, ケニア，エチオピア，ジブチに居住している。そのため，誰がソマリランドから来たソマリ人であるのかを見極めることは簡単ではなかったという。男性 A は，難民認定のプロセスにて他地域出身のソマリ人によってソマリランドという名乗りが偽って使われている状況があると捉えていた。

また，男性 A が SSUK をチャリティ委員会の登録団体としてではなく，有志が集まり，自ら資金を集めて運営するスタイルにしたことにおいても名を取り巻く疑念が影響していたと考えられる。イギリスにはチャリティ委員会という行政機関があり，チャリティ委員会に団体の設立を申請し，それが認められればチャリティ団体として活動することができる。チャリティ団体になると，地方自治体やその他の助成団体に対して運営やプロジェクト実施のための助成金を申請することができる。しかし，男性 A は SSUK を設立する際にチャリティ委員会に登録することを選択しなかった。男性 A は当時の状況を次のように話した。

> 地方自治体から支援を受けるとNGOのようになってしまいます。私たちは地方自治体から支援を受けていた他の多くのNGOと差別化したかったのです。私たちは完全に違うものであり，NGOにはなりたくなかったのです。これはとても重要なことでした。私たち

9）この時期にソマリランドでは武力対立が悪化したため、男性 A はソマリランド平和委員会の活動を始めた。

は独立していたかったのです。地方自治体が支援しているNGOはソマリランド人だけで運営されていませんでした。なぜなら，ここでは皆がソマリ人だからです。私たちはそれらと区別したかったのです。でなければ，彼らにとって問題になるからです。彼らは自分たちの資源が減ってしまうと思うでしょう。私たちは完全に区別したかったのです。いくつかのNGOには私たちと働いているソマリランド人が関わっていました。だから彼らに影響しないよう，私たちは政治的に注意する必要がありました。…中略…NGOのなかには例えば，3人のソマリランド人，2人のソマリア人，1人のエリトリア人という場合もあったでしょう。なぜなら地方自治体はソマリ人に対して支援をしていたからです。それはとても複雑でした。それを理解しておく必要があります[10)]。

男性Aは，SSUKをチャリティ委員会に登録すると，他の団体との間で地方自治体などからの助成金の奪い合いが発生してしまうことを懸念していた。SSUKの活動に関わっていた人物が，他にチャリティ委員会登録団体の活動もしていたためである。しかし同時に，ここで男性Aは助成金の配分を巡る問題のみを話しているのではなく，チャリティ委員会の登録団体になると自分たちが本当にソマリランド出身者であることが周囲に示せないことも懸念していたと考えられる。

男性Aによると，当時のイギリス政府はソマリ人と名の付く活動へ支援を強化していたが，そこで支援される団体にはソマリランド出身者のみではなく，南部地域出身のソマリ人，さらには他国の出身者が含まれていた。既述したように，ソマリ人はケニアやエチオピア，ジブチにも居住しており，誰がソマリランドから来たソマリ人なのかは一目では分からない。そのため，難民認定プロセスでもソマリランドという名乗りが偽って使われていたと男性Aは考えていた。この状況において，チャリティ委員会の登録団体になることは，助成金の配分において他団体と競合関係になるのみではなく，本当にソマリ人なのかという疑いの目を向けられるのと同時に，さらに本当にソマリランド人なのかも疑われることに繋がってしまう。ゆえに，男性Aはソマリランドという名乗りが真正であることを証明するためにも，SSUKを独立したグループとして設立したと考えられる。

以上の男性Aの語りから，SSUKが発足に至るまでの背景として，二つの点を挙げることができる。一つは，当時，イギリスにおけるソマリ人庇護申請者数が増加したことに対し支援をしようとしたことである。もう一つは，難民認定プロセスにおける名乗りやチャリティ委員会登録団体との関係を鑑みると，ソマリランドという名乗りを取り巻く疑念に対して，その名乗

10）筆者によるロンドンでのインタビュー（2016年1月20日）。ここで男性Aが言っているNGOとは、チャリティ委員会に登録された団体のことを指している。

りが本物であると示す必要があったことである。SSUK 発足の背景には，支援を必要とする人びとの存在はもちろん，むしろそれ以上にイギリスにおけるソマリランドという名乗りを巡る疑念があったと考えられる。

SSUK に参加した人びとの間にはいかなる繋がりがあったのか

難民への支援や，ソマリランドという名乗りを取り巻く疑念に対して発足した SSUK の活動に関わった人びとは，いかなる繋がりによって集まったのだろうか。男性 A への聞き取りから，SSUK の活動は毎回数名の人びとがミーティングに集まることで始められていたことが分かった。そこで筆者は男性 A に対して，どのように人びとが集まったのかと聞くと，男性 A はしばしば「お互いに知っていた」と答えた。つまり，初対面の人びとが集まって SSUK の活動が始められたのではないということである。

上述のように，ソマリ人はその内部で氏族に分かれているため，血縁関係に基づいて人びとが相互に知っていたという状況も考えられる。しかし，男性 A は「血縁関係は必要だが十分ではない」と述べつつ，男性 A 自身が調査を進めているという保護領時代の世俗教育と関連付けて人びとの繋がりを説明した。例えば，男性 A は次のように述べたことがあった。

> 教育を受けた人びとはとても限られていました。本当に限られていました。だからお互いに知っていました。私たちは1950年代半ばにハルゲイサで小さなソサイエティを作りました。SOBAと呼んでいました。シェークを卒業した人びとと一緒にです。Sheikh Old Boys Associationの略だったと思います。卒業生が次々に参加しました。世俗教育システムを経験した人びとです。血縁関係は全てではありません。とても重要ですが。こんな表現が当てはまると思います。必要だが十分ではないという言い方が適切だと思います[11)]。

シェークというのはソマリランドの一つの地域の名前であり，そこに設立された学校であるシェークスクールのことである。保護領時代，ソマリランドでは世俗教育を受ける機会は極めて限られ，シェークという言葉はソマリランドではそのまま世俗教育を意味していたと男性 A は話した。男性 A は中等教育（intermediate school）までをシェークで学んだ後，高等教育（secondary school）に進むためにスーダンに行った。スーダンに行くことができたのは，男性 A を含めて男子５人のみだったという。男性 A のグループは高等教育を受けるためにスーダンに行った最後のグループとなり，1953 年にはシェークスクールでも高等教育が始まった。

11）筆者によるインタビュー（2016 年 2 月 16 日）。ここで男性 A が言っているハルゲイサとは現在のソマリランドの「首都」である。

その代は一クラス 16 人で構成され，そこにはソマリランドの第 4 代大統領であるモハメド・シラーニョも含まれていたという（須永 2017）。

男性 A の話から，世俗教育を受けたことがある人びとの人数はとても限られていたため，それが共通項となり，人びとを繋げるリンクとして国境を超えて機能していたと考えられる。実際に，例えば男性 A は，イギリスでソマリ人難民が増加した状況に対して何か行動をしようと相談した相手である男性 B のことを，1940 年代から知っていたという。男性 B は，ソマリランドが保護領時代に世俗教育を受けた初期のグループの一人である。シェークスクールが設立される前であったため，男性 B はイエメンのアデンで教育を受けた。その後，男性 B はソマリランド行政において唯一のソマリ人上級行政官（senior civil servant ／ clerk）として働いた人物である。男性 B は男性 A がモガディシオの政府機関で働いていた時の上司でもあったという。このように, 男性 A は SSUK を始める際に集まった人びとは, 世俗教育の経験によって既にお互いを知り，繋がっていたと捉えていた。

他方で，男性 A の話からは SSUK の活動は世俗教育を受けた人のみが参加できる固定的なメンバーシップによるものではなかった面があることも分かった。男性 A は，人びとの集まり方について次のように話した。

> ヒエラルキーはありませんでした。私たちはコミュニストのようでした。皆が同じようでした。ストラクチャーは後から作りました。私たちは最初はフリーランスでした。皆で集まって，ドラフトをつくり，家に帰って，二三日後に電話をしてカフェに集まったりしました。…中略…それはただただ自主的な活動でした。誰かが指示をするのではなく，それはとてもインフォーマルで，ヒエラルキーもありませんでした。ストラクチャーも全くなかったです[12)]。

ここで男性 A が話しているように，男性 A は会則のドラフトを作成し，その内容を集まったメンバーで話し合ったという。ただ，そこで集まるメンバーは必ずしも参加の義務があるのではなく，参加できる人が参加し，他に呼べる人がいれば声をかけ，ミーティングの場所も固定されていなかったという。その時その時で，集まった人びとのなかで何ができるかを考えながら SSUK の活動は始められたのである。男性 A は SSUK を人びとの自主的な活動として説明した。

男性 A の話から，SSUK の活動に参加した人びとの繋がり方および集まり方には二つの傾向があったと考えられる。一つは，世俗教育を受けたことがある人びとの繋がりであり，それは

12）筆者によるロンドンでのインタビュー（2016 年 1 月 12 日）。

血縁関係を超えて人びとを結び付けていたことである。確かに，他の繋がりや意図で SSUK に参加した人びともいた可能性はあるが，少なくともこの活動が特定の血縁関係のみに基づいたものではなく，保護領時代の極めて限られた世俗教育の経験による人びとの結びつきが SSUK の活動で活用された側面があると言える。もう一つは，人びとが自主的に集まり，活動が始められたことである。組織化され，明確な指揮系統があったのではなく，その時々で集まった人びとが出来ることをしていた。SSUK の活動は，世俗教育の経験を基盤とした人びとの結びつきが活用されつつも，人びとはその結びつきに縛られることはなく，人びとの自主性に委ねられて始められた活動だったのである。

なぜ SSUK の活動は衰退したのか

世俗教育を受けた経験のある人びとが自主的に集まることで活動をしてきた SSUK であるが，本稿の冒頭で述べたように，筆者がロンドンで調査をした時点ではその活動は停滞していた。男性 A も SSUK の活動からは「リタイアした」と言い，その活動には携わっていなかった。男性 A は，彼自身が SSUK から離れ，そして SSUK の活動が停滞した状況を次のように述べた。

> 私は完全に時代遅れです。正直に言うと。昔はこれほど多くのソマリ人はいませんでした。…中略…今は本当にたくさんの人びとがいて，多くの様々な考え方があります。…中略…私は活動からリタイアしました。…中略…今は完全に異なっています。異なっていますし，このような活動をするのは難しいとも思います。SSUK については，私たちは会則をつくることなどをとても熱心にやっていました。銀行口座を開設するとか。それは本当のソサイエティでした。そして，政党がきました。SSUK が失敗したとしたらそれは政党のせいです。なぜなら人びとは政党に参加したからです。そして衰退しました[13]。

前述のように，ソマリランドでは 2001 年に憲法が承認された。この憲法の規定に基づき，ソマリランドには三つの政党がある。それら全ての政党はソマリランドだけで活動しているのではなく，ロンドンでも支持者を集め，支持者から選挙活動に必要な資金を獲得しようと活動をしている。筆者がロンドンで調査をしている間にも，各政党のミーティングが開かれており，筆者も *Kulmiye* という政党のミーティングに参加したことがある。そこでは，政党の旗が飾られ，中心メンバーと思われる人びとが挨拶をするだけではなく，参加者同士の交流の場にもなっていた。男性 A は SSUK の活動とソマリランドの政党の活動が重複した出来事として次のように話した。

13）筆者によるロンドンでのインタビュー（2016 年 1 月 12 日）。

これは私の考えで間違っているかもしれませんが，政党が発足してから人びとは異なる地域に分かれていきました。ソサイエティはとてもとても弱くなりました。私は，たまたまハルゲイサでSSUKのチェアマンだった人物に会ったことがありますが，その時，彼はある政党のチェアマンになっていました。このように，人びとはそれぞれの政党に参加するようになりました。そのため，ソサイエティは弱くなりました。ソサイエティがとても弱体化した主な原因はこれだと私は考えています。政党をつくるのは良いことです。人びとは氏族ではなく政党として話すことができます[14)]。

この語りから，男性 A は SSUK の代表であることと特定の政党の主要メンバーであることは両立しないと考えていることが分かる。そして，人びとが政党活動に参加するようになったことで SSUK に集まった人びとが分散したと捉えていた。既述したように，SSUK は組織として固定されていたのではなく，人びとの自主的な集まりであり，その時その時に集まれる人が行動をしていたのである。そのため，SSUK に関わっていた人びとがソマリランドの政党活動に関わるようになれば, 自動的に SSUK に関わる時間も減少し, 人びとが集まる機会はなくなっていくと考えられる。しかし，上述のように SSUK の活動が始められた時点では，チャリティ委員会登録団体に関わっていた人物も SSUK に参加していたことを鑑みると，人びとが単に他の活動で忙しくなったために SSUK に割く時間が減少したとは言えない。

むしろ問題は，ソマリランドの各政党の支持基盤が特定の血縁関係に基づいていることである。筆者がロンドンで調査をしている際も，人びとの間では各政党には政策的な違いがあるわけではなく，単に支持基盤となる血縁関係が異なるだけだという認識が共有されていた。実際に，ロンドンの西部で *Wadani* という政党のメンバーとして活動している男性は，活動資金の支援を求める際には血縁関係をたどると話していた。もちろん，各政党が公に特定の血縁関係に言及することはないが，人びとの間では政党と血縁関係の結びつきは公然の事実となっている。

男性 A は「人びとは氏族ではなく政党として話すことができる」と述べ，政党政治そのものを否定しているわけではない。上述のように，男性 A はソマリ人の慣習に対して肯定的に評価している部分もあり，氏族の存在そのものを完全に否定的に捉えているわけではない。しかし,「血縁関係は必要だが十分ではない」と考える男性 A にとって，必要条件のみに人びとが回収されていき，他の要素が看過されてしまった状況は深刻であったため，SSUK から離れたと考えられる。

14）筆者によるロンドンでのインタビュー（2016 年 1 月 20 日）。

男性Aへの聞き取り結果に基づくと，SSUKの活動が停滞した要因は，ソマリランドで政党政治が始まり，それが越境的に展開されるようになったことだと考えられる。SSUKの活動に自主的に参加していた人びとが政党政治に関わるようになったため，SSUKという名のもとで集まることが困難になったのである。ソマリランドから地理的に離れているロンドンにいる人びとにとって，ソマリランドという名のもとで集まることと血縁関係に基づく政党政治にかかわることの両立は非常に難しいと言える。

おわりに

本稿は，男性Aへの聞き取り結果をもとに，SSUKの発足から停滞までのプロセスを，SSUK発足の背景やSSUKに集まった人びとの繋がり，活動が衰退した理由という三つの点に着目して分析した。その結果，SSUKの活動はイギリスにおけるソマリランド人を取り巻く状況に対応するために，世俗教育を受けたことのある人びとが自主的に行っていたが，ソマリランドで政党政治が行われるようになると人びとが政党政治に関わるようになったため，SSUKの活動が停滞したことが分かった。

この分析結果を踏まえると，ソマリランドという名の下における人びとの集散には二つの特徴があると考えられる。一つは，ソマリランドとイギリスという地理的には離れた場所における双方の状況から影響を受けることである。SSUKの設立に至るまでの背景には，そもそもアフリカの角で紛争が悪化したことでイギリスにおいて庇護申請者数が増加したことがあった。また，イギリスにおけるチャリティ委員会登録団体との兼ね合いも考慮されていた。活動が衰退していく理由は，ソマリランドで行われるようになった政党政治がイギリスへも越境して展開されていることであった。ソマリランドとイギリスにおける出来事は切り離されているのではなく，むしろ繋がっている。ゆえに，人びとは二つの場所の状況から影響を受けながら集まり，そして離れていくと考えられる。

もう一つは，名乗りをめぐる疑念である。難民認定プロセスおよびチャリティ委員会登録団体との関係において，SSUKはソマリランドという名乗りを取り巻く疑念に対して，自らは真の名乗りをしていることを示す必要性を鑑みて，独立したグループとして設立された。ソマリランドという名乗りに偽りがないことを周囲に対して証明しなければならない環境だったと言える。また，ソマリランドの政党政治との関係においても，同様の疑念があると考えられる。ソマリランドという名乗りを伴う集まりに政党政治，さらに言えば血縁関係が入り込んでしまうと，何者として，何のためにその名乗りを用いているのかが極めて疑わしくなる。SSUKの発足時に懸念されていたように，ソマリランドという名はそれぞれの都合によって用いられてきた経緯がある。ソマリランドという名がいかなる目的によって使われているのかを人びとは注視してきた。ソマリランドという名乗りにおける人びとの集散は常に疑念と共にあると言え

る。

SSUK は，あらゆることが越境的側面を持つ時代にて，「名」そのものを選択し，人びとがその名のもとで集まることにおける試みである。確かに，2016 年時点ではソマリランド大統領が訪英した際に SSUK の代表が挨拶をするなど，SSUK は存続しているが，活動は停滞している。名が存在していても，そこに人びとの集団があるとは限らないということである。ゆえに，集団主義を回避しつつ人びとの動態を考察するためには，本稿で試みたように，名乗りのもとでの人びとの集散を分析することが重要である。出身地域を離れた人びとは，移住先で自動的に出身国名を掲げた集団を形成するわけではない。

ロンドンではソマリランドという名を巡る疑念が人びとの間にはあった。この疑念はソマリランドが未承認国家であることと関係しているとも考えられるが，本稿ではこの点を考察に含めることができなかった。今後は，ソマリランドが未承認国家であることとソマリランドという名を取り巻く疑念の関係についても考察を進めていきたい。

参考文献

〈日本語文献〉

内堀基光（1989）「民族論メモランダム」田辺繁治編『人類学的認識の冒険：イデオロギーとプラクティス』同文舘出版，27-43 頁。

———（1997）「民族の意味論」『民族の生成と論理』，岩波書店，5-28 頁。

遠藤貢（2015）『崩壊国家と国際安全保障―ソマリアにみる新たな国家像の誕生』有斐閣。

須永修枝（2017）「「ソマリ・ディアスポラ」とソマリランド平和委員会：「個人」に注目して「ディアスポラ」の越境的な活動を捉える」駒井洋監・人見泰弘編『移民ディアスポラ研究 第 6 号：難民問題と人権理念の危機』明石書店，284-304 頁。

ブルーベイカー , ロジャース（2009）「『ディアスポラ』のディアスポラ」臼杵陽監修，赤尾光春・早尾貴紀編『ディアスポラから世界を読む―離散を架橋するために』明石書店，375-400 頁。

〈外国語文献〉

Bradbury, Mark（2008）*Becoming Somaliland*. London: Progressio.

Caspersen, Nina（2012）*Unrecognized States: The Struggle for Sovereignty in the Modern International System*, Cambridge: Polity.

Change Institute（2009） *The Somali Muslim Community in England: Understanding Muslim Ethnic Communities*. London: Communities and Local Government.

Hansen, Peter（2007）“ Revolving Returnees in Somaliland.” In *Living Across Worlds: Diaspora, Development and Transnational Engagement*, edited by Ninna N. Sørensen. Geneva: IOM, 129-150.

Hopkins, Gail（2006）“Somali Community Organizations in London and Toronto: Collaboration and Effectiveness.” *Journal of Refugee Studies,* 19: 3, 361-380.

Lewis, I.M.（1961）*A Pastoral Democracy: A Study of Pastoralism and Politics among the Northern Somali of the Horn of Africa.* Oxford: Oxford University Press.

———（1994）*Blood and Bone: the Call of Kinship in Somali Society*, Lawrenceville, NJ.: Red Sea Press.

Pirkkalainen, Päivi, Petra Mezzetti and Matteo Guglielmo（2013）“Somali Associations' Trajectories in Italy and Finland: Leaders Building Trust and Finding Legitimisation.” *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 39:8, 1261-1279.

SSUK（発行年不明）*Somaliland Society UK 3 Years Report*.

〈ウェブサイト〉

Somaliland Diaspora Office　https://sldiasporaoffice.com/（2022 年 3 月 22 日最終アクセス）